

スピンモデルによる金融市場のシミュレーション

広島経済大学

高石 哲弥

1.Introduction

実際の金融市場における価格変動をシミュレーションする(最大限)簡単なモデルは？

パラメータの少ないモデル

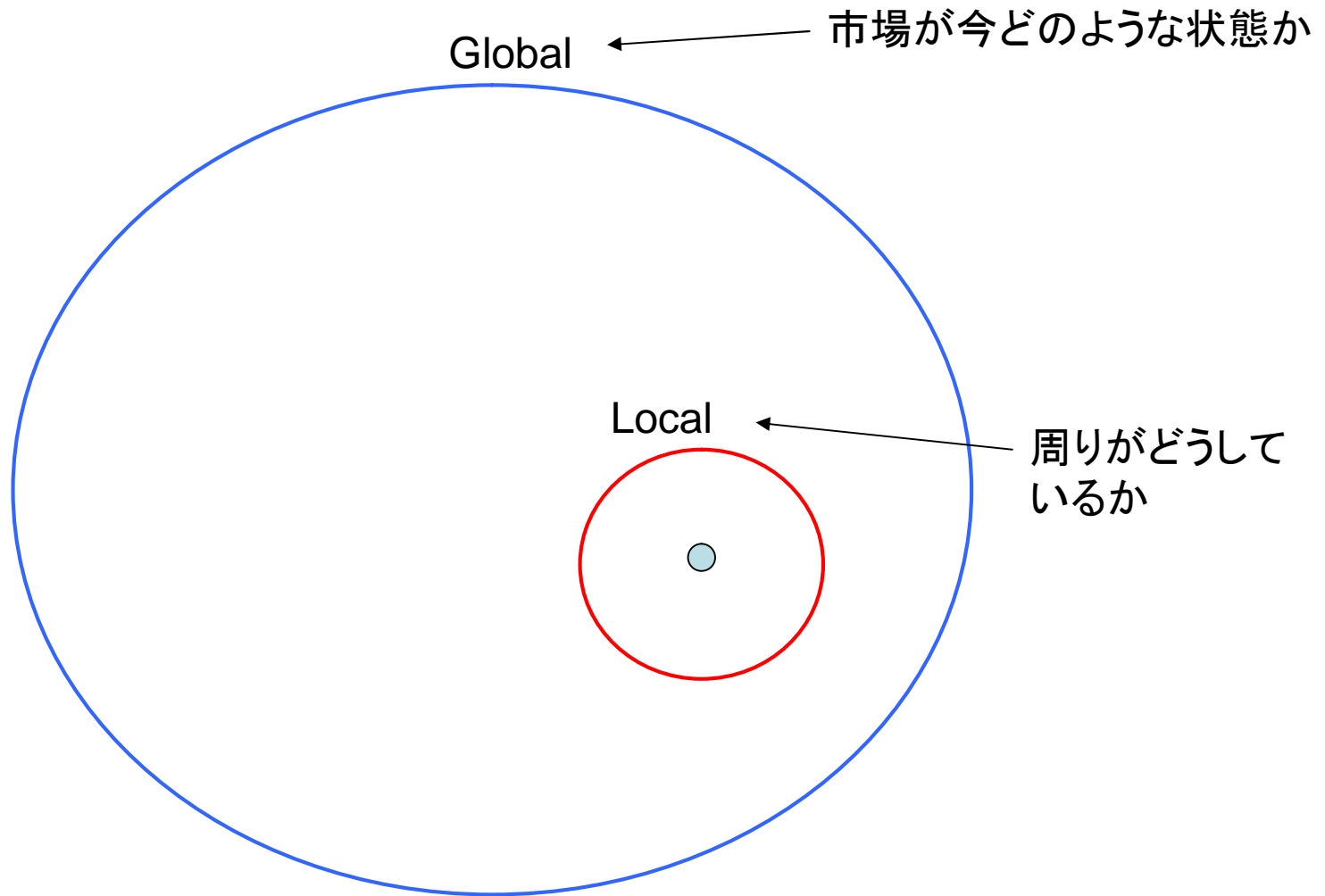
特にbubble とcrash

Bornholdtのスピンモデル

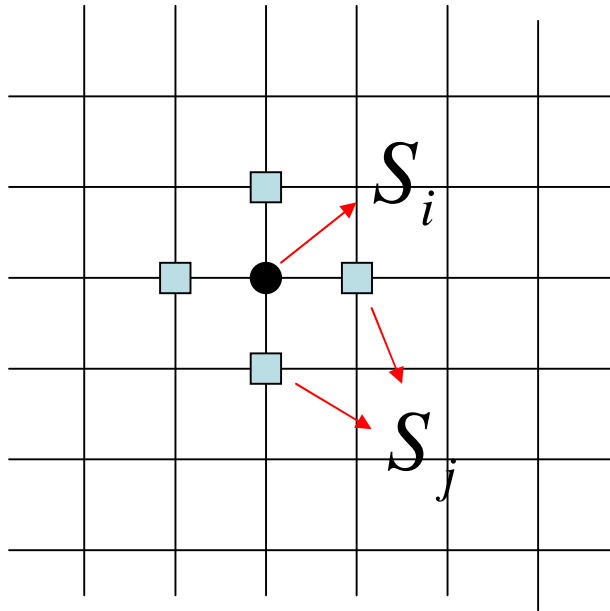
LocalとGlobalな相互作用を持つ

このモデルは実際の市場における価格変動の性質のいくつかをよく表す。

金融市場で受ける2つの力



2. Bornholdt's spin model



S.Bornholdt, Int.J.Mod.Phys.C12(2001) 667

T.Yamano, Int.J.Mod.Phys.C12(2002)

T.Kaizoji, S.Bornholdt, Y.Fujiwara, Physica A 316 (2002) 441

Ising モデルをもとにしたモデル

S_i は+1または-1をとる

Buy

Sell

例えば、

磁化 $M(t) = \frac{1}{n} \sum_j S_j(t)$ → Buy数とSell数の差

$$h_i(t) = \sum_{j=1}^n J_{ij} S_j(t) - \alpha S_i(t) |M(t)| \quad \alpha > 0$$

Local interaction Global interaction

以下の確率でupdate

$$S_i(t+1) = +1 \quad p = 1/(1 + \exp(-2\beta h_i(t)))$$

$$S_i(t+1) = -1 \quad 1 - p$$

Local interaction: スピンを揃える効果 — 周りに影響を受ける

Global interaction: $|M(t)|$ が大きければスピンをフリップ — 多数派 ⇔ 少数派

リターンの定義

S.Bornholdt $r(t) = \ln |M(t)| - \ln |M(t-1)|$

T.Kaizoji, S.Bornholdt, Y.Fujiwara $r(t) = M(t) - M(t-1)$

Update schemeと時間 t の定義

Hamiltonian? Detailed balance?

Sequential update

アップデートするスピンの順番を固定

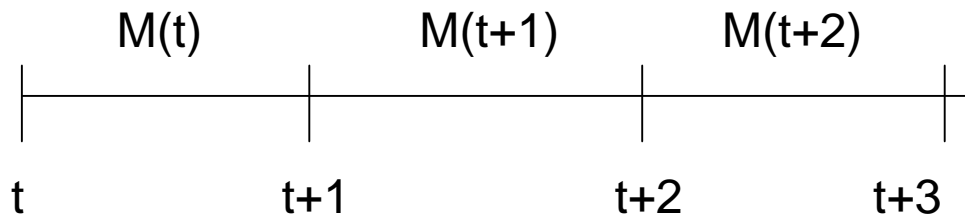
Random update

ランダムに選んだ順番でスピンをアップデート

Simultaneous update

すべてのスピンを同時にアップデート

$$h_i(t) = \sum_{j=1}^n J_{ij} S_j(t) - \alpha S_i(t) |M(t)|$$



3.Simulation

格子サイズ: $L \times L$ $L = 71, 100, 141$

パラメータ: $\beta = 2$

$\alpha = 5, 10, 15, 20, 30$

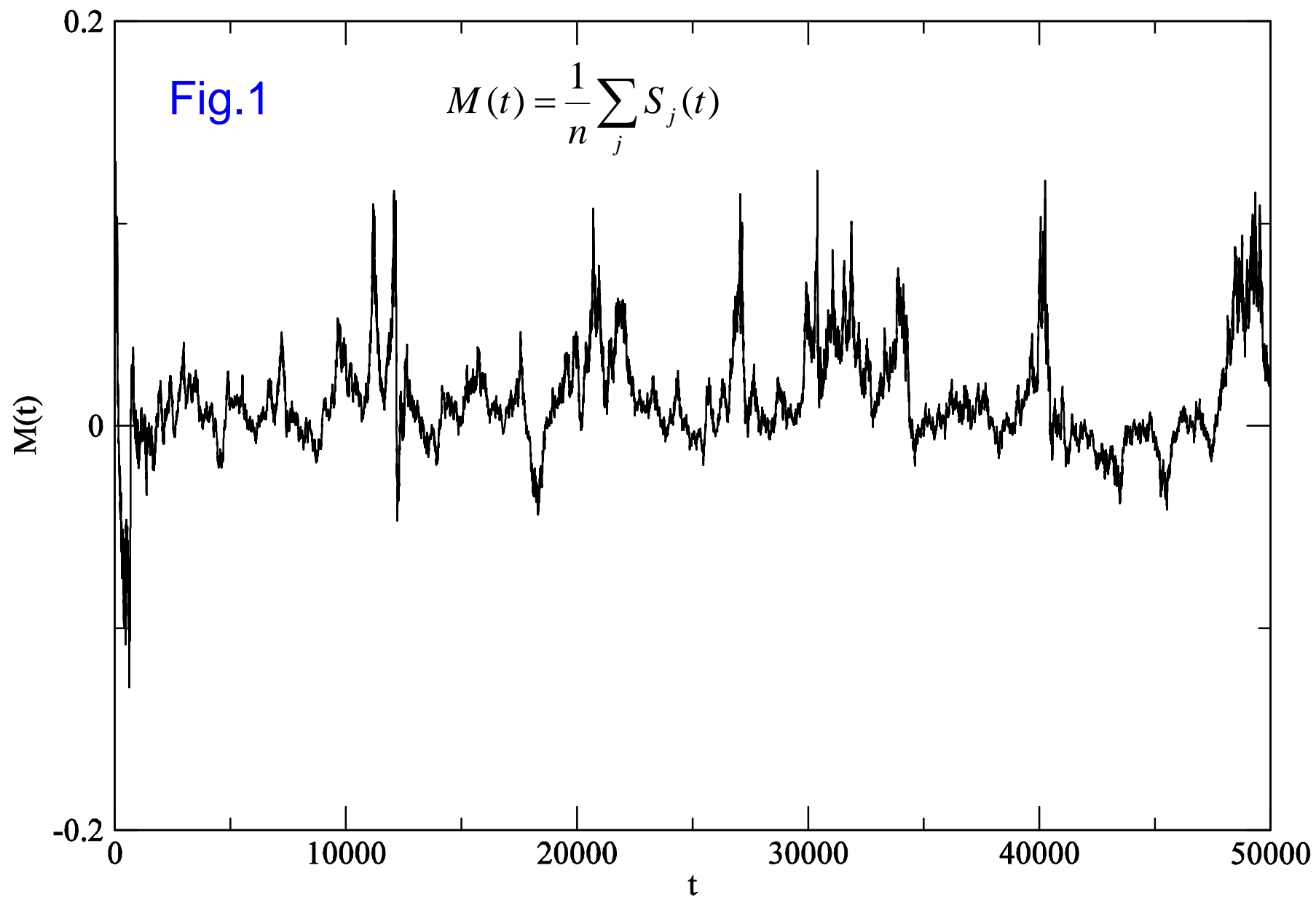
$J_{ij} = 1$ nearest neighbor のみ

それぞれのパラメータで5,000,000 updatesを行う

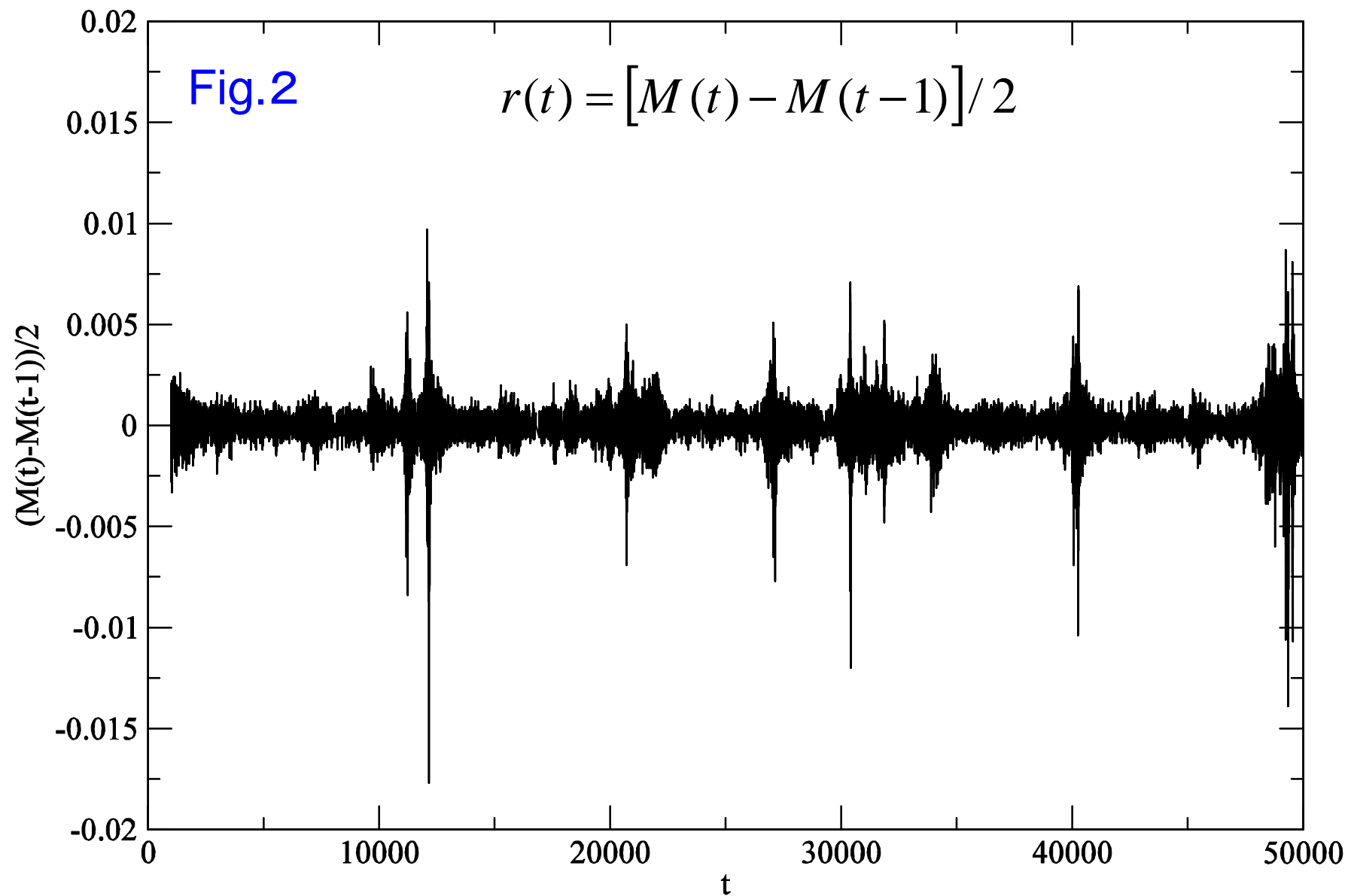
測定量:

磁化: $M(t) = \frac{1}{n} \sum_j S_j(t)$ Fig.1

リターン: $r(t) = [M(t) - M(t-1)] / 2$ Fig.2



$L=100 \quad \beta=2 \quad \alpha=20$



リターンのヒストグラム

α を変えたもの→ Fig.3

Fat tail が見られる

α を変えても大きな変化は見られない

格子サイズを変えたもの→Fig.4

格子サイズの小さいほうがFat tail が顕著に見られる

q-Gaussian によるフィット

$$e_q^{-ax^2} = 1/[1 + (q-1)ax^2]^{1/(q-1)}$$

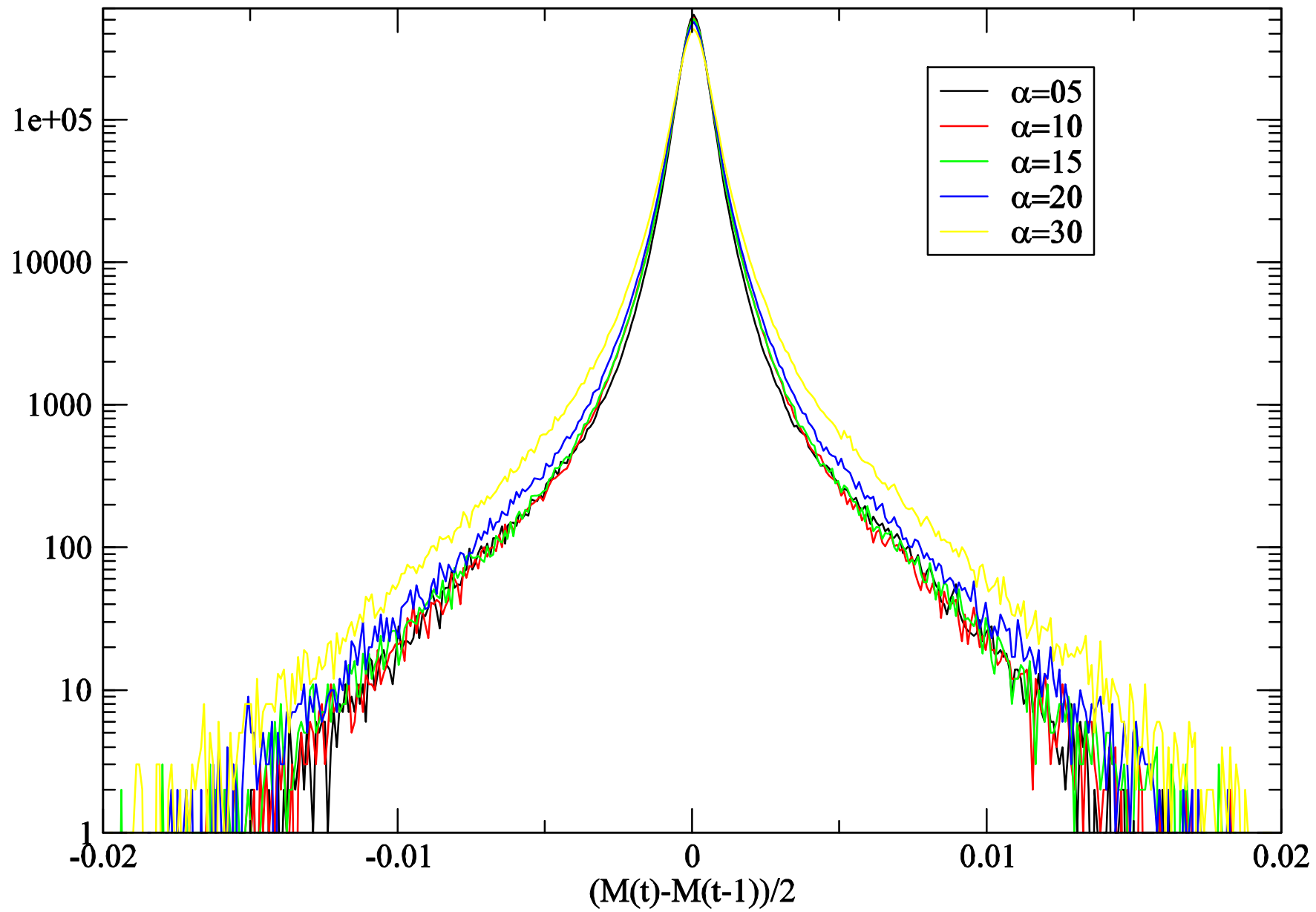
$$\lim_{q \rightarrow 1} e_q^{-ax^2} = e^{-ax^2}$$

q=1でGaussian

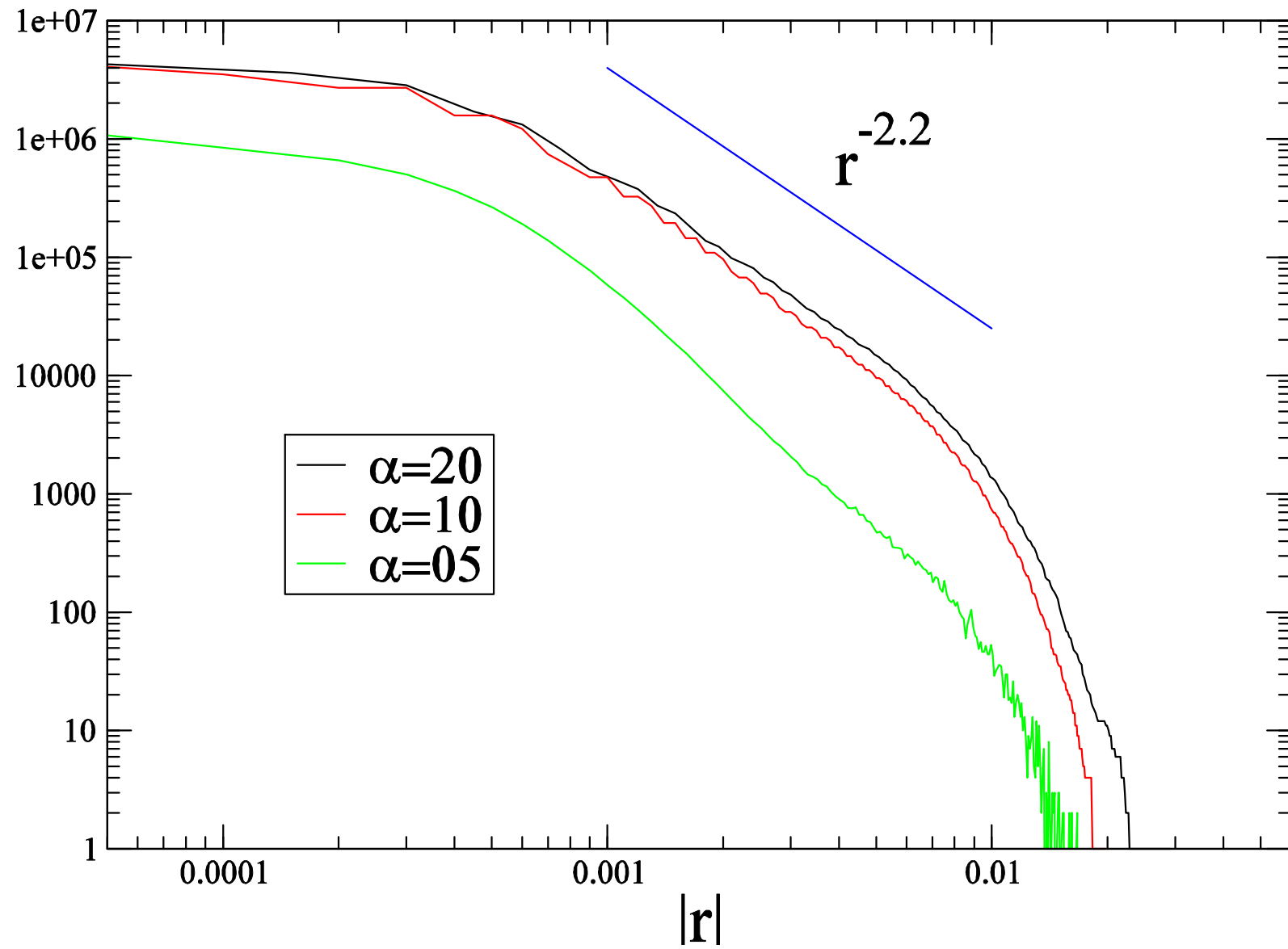
q=1.5~1.7の結果が得られるがxが大きいところでの
フィッティングは悪い Fig.5

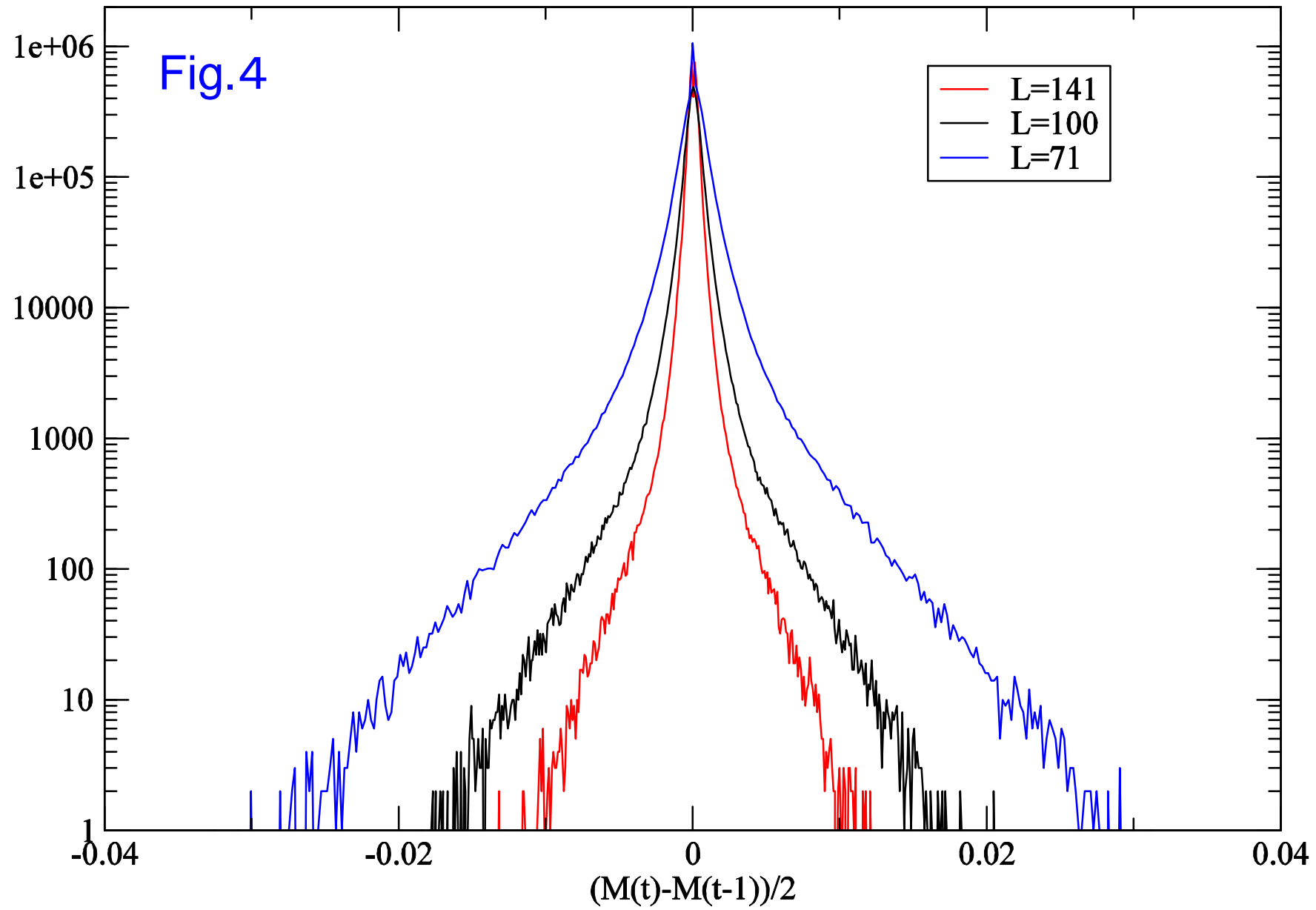
L=100 $\beta=2$

Fig.3



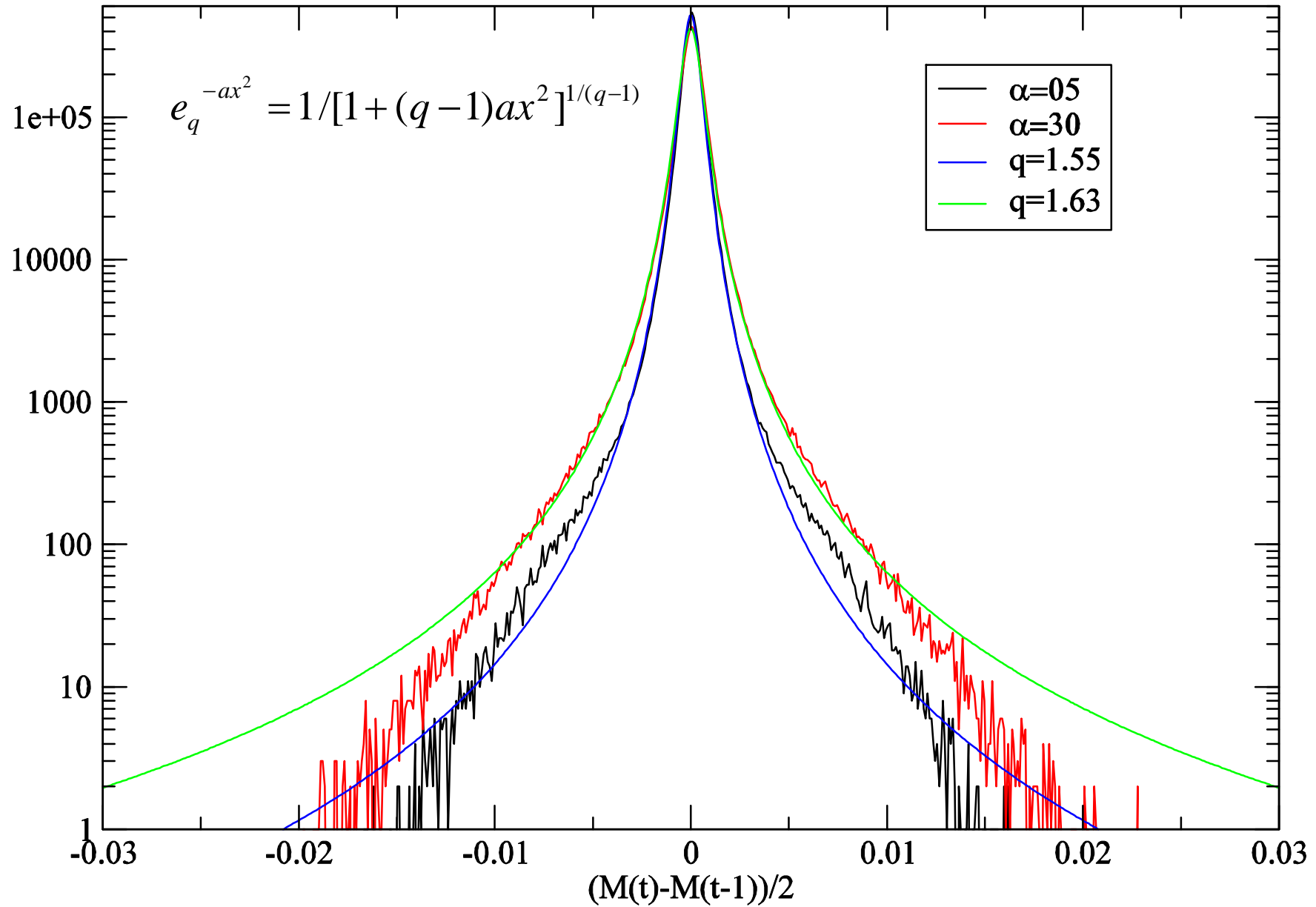
L=100 $\beta=2$





L=100 $\beta=2$

Fig.5



Autocorrelation function $C(T) = \frac{\langle r(T+t)r(t) \rangle - \langle r(T+t) \rangle \langle r(t) \rangle}{\sigma^2}$

リターンの絶対値の相関関数: Fig.6とFig.7

相関は α が大きくなると小さくなる

相関は格子サイズが大きくなると大きくなる

もし、相関関数が次のような関数であれば

$$C(t) = \exp\left(-\frac{t}{\tau_0}\right)$$

積分すると定数になる。 $\int_0^{\infty} C(t) dt = \tau_0$

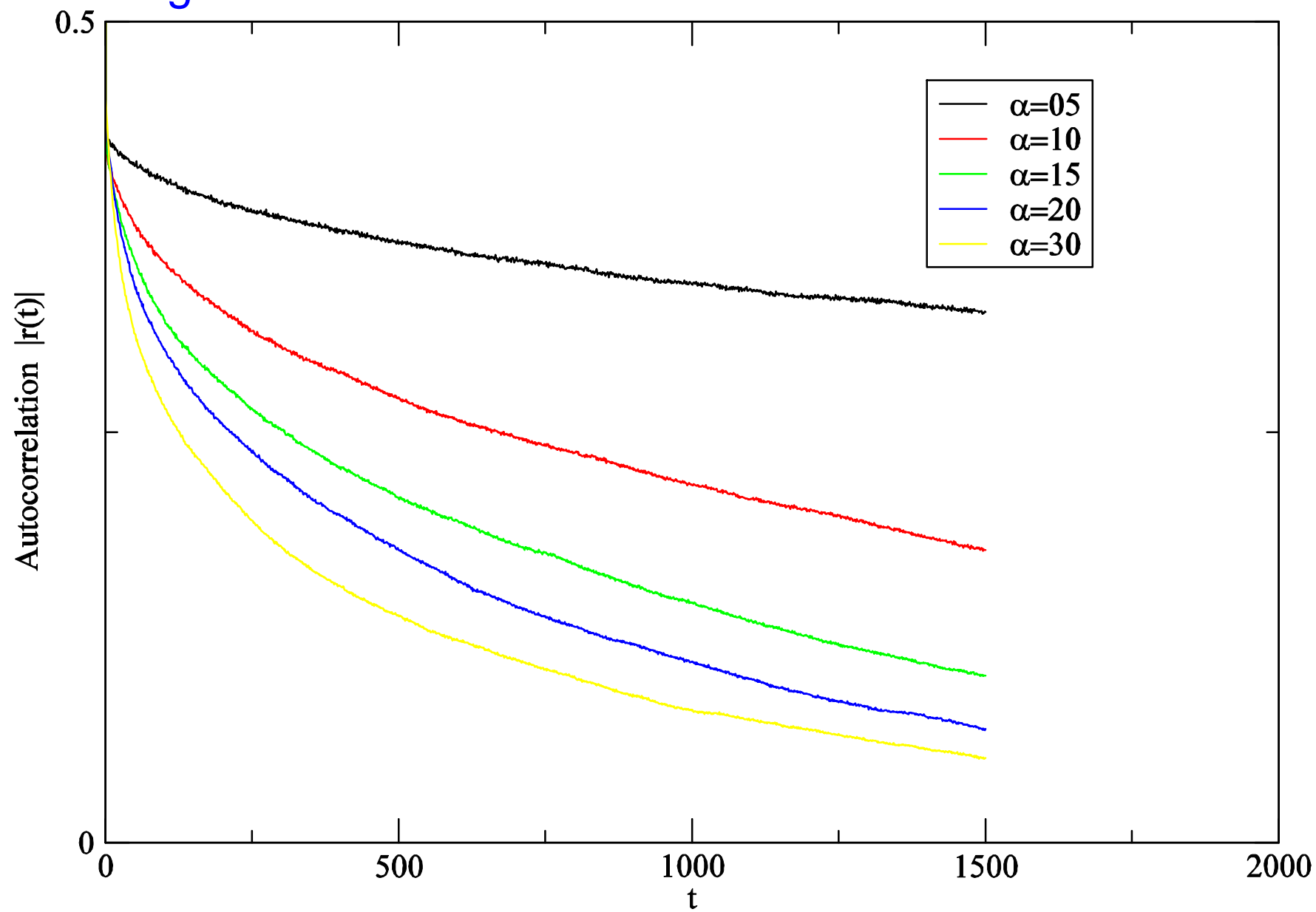
Integrated autocorrelation function: Fig.8とFig.9

T=1500までいってもまだ増加 → 指数関数的な減少はこの時間までいっても見られない

リターン自身には**負の短期相関**が見られる

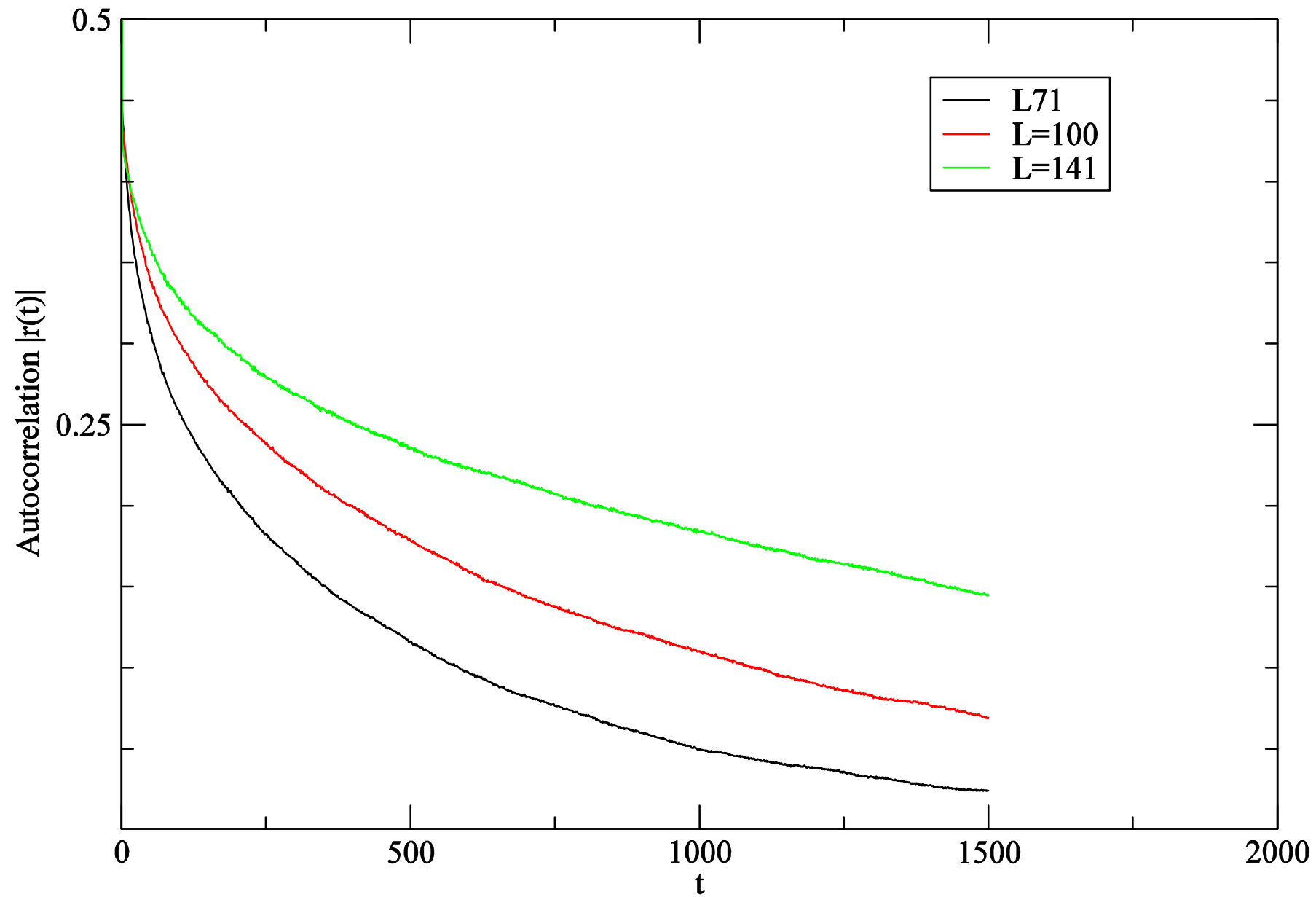
L=100 $\beta=2$

Fig.6



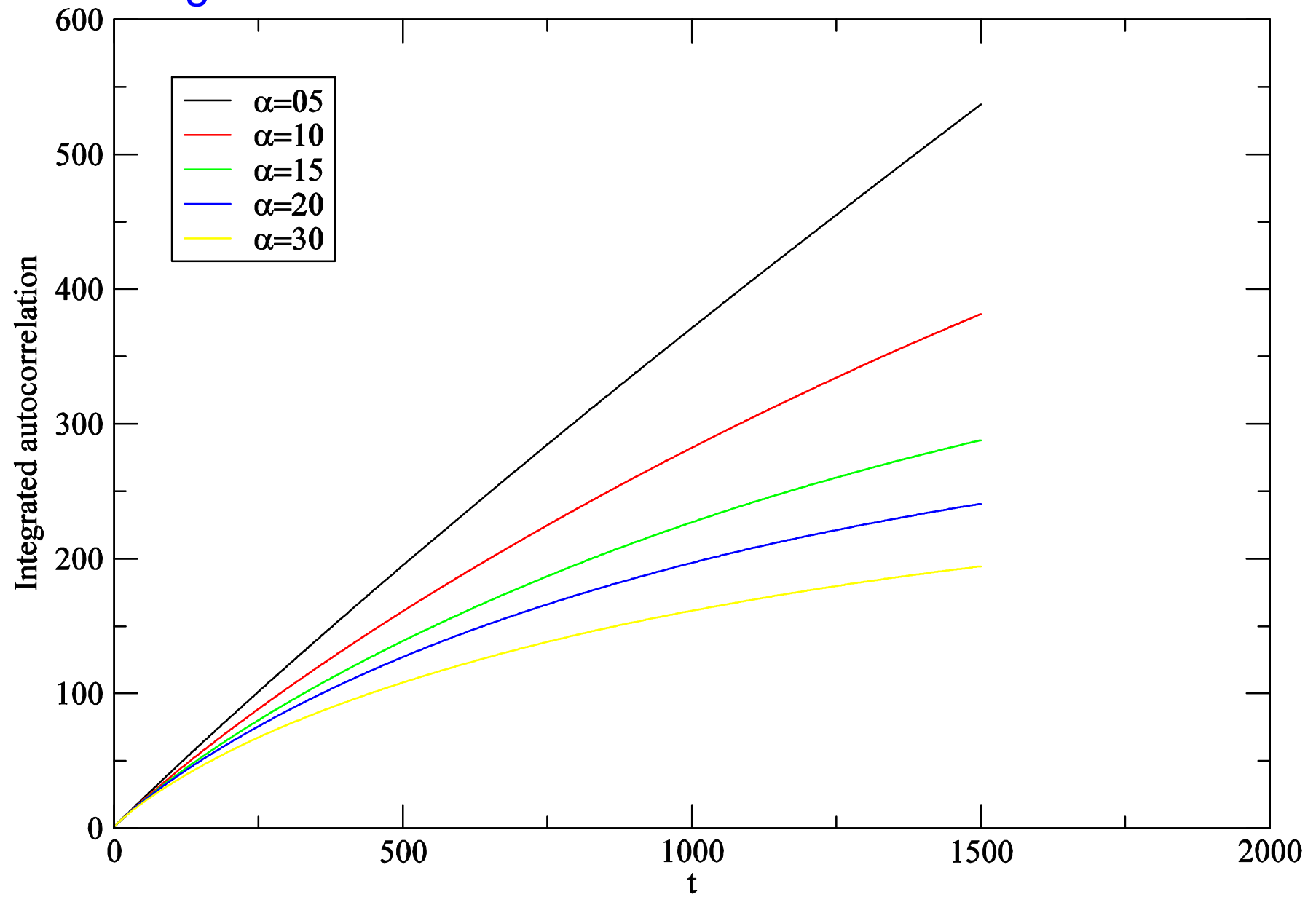
$\beta=2$ $\alpha=20$

Fig.7



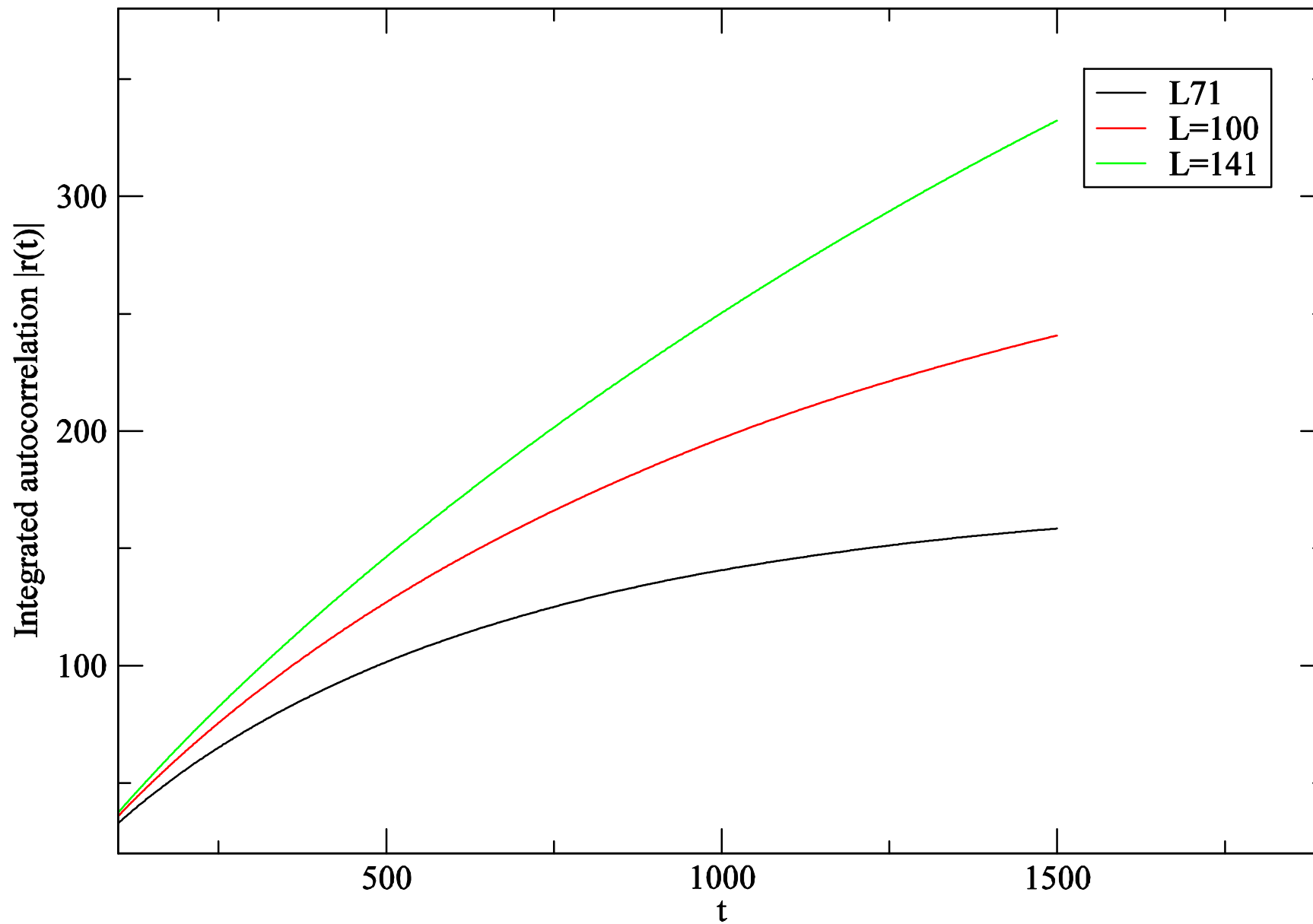
L=100 $\beta=2$

Fig.8



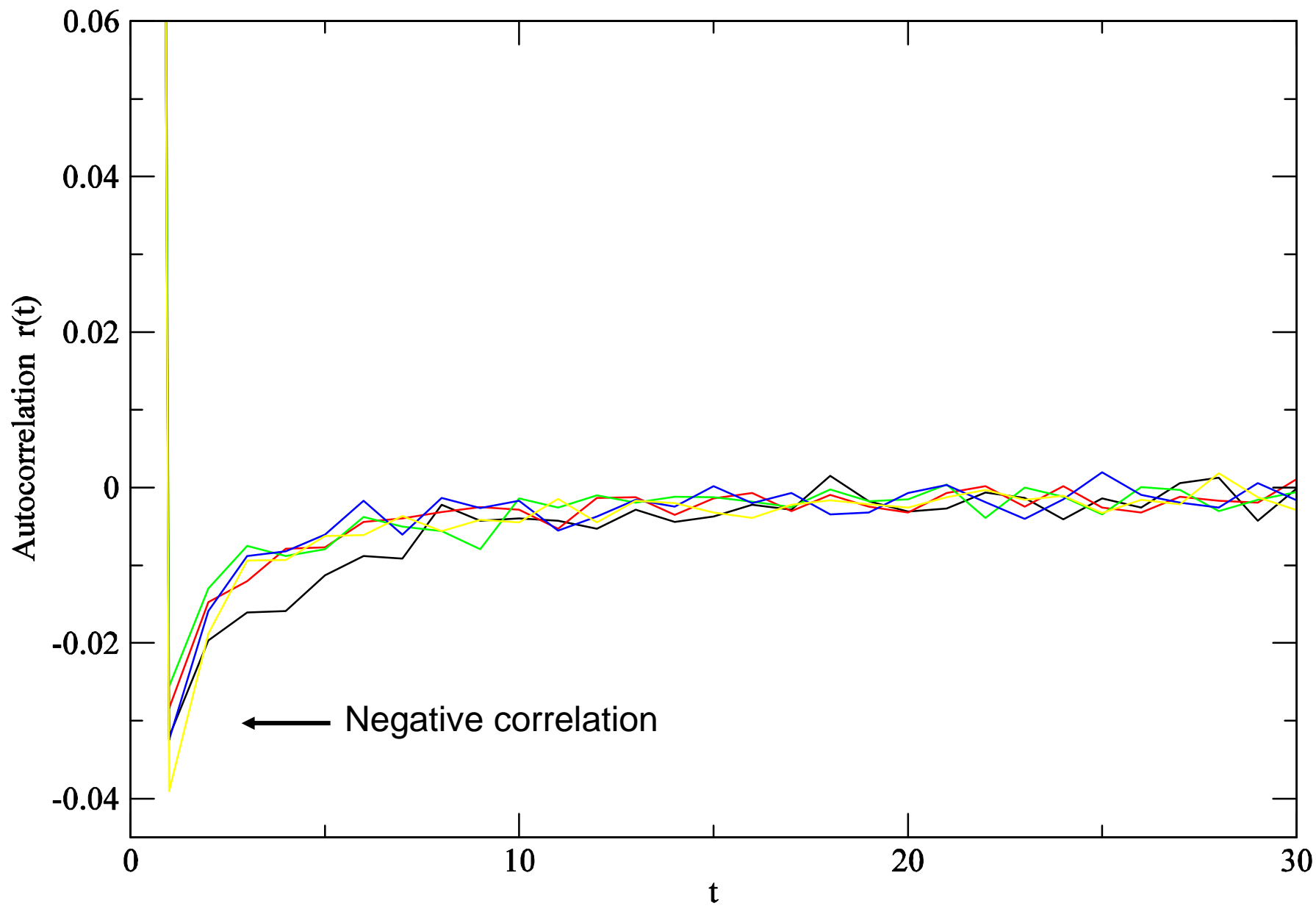
$\beta=2$ $\alpha=20$

Fig.9



L=100 $\beta=2$

Fig.10



4. Summary

- Bornholdtのspinモデル(LocalとGlobalな相互作用を持つ)を利用してシミュレーションを行った。
- リターンの分布にFat tailが現れる(non-Gaussian)。q-Gaussianによるフィッティングを行った。リターンの絶対値の長期相関、リターン自身には負の短期相関が見られる。
- 今後: 相互作用の形を変化させたらどうなるか。LocalとGlobalな相互作用を持つほかのモデルでも同様な結果が得られるか?.....